九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[026] 史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339185

出版情報：史淵. 26, 1941-11-25. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

彙報

九州史學會

九州史學會昭和十六年度大會は六月八日(日曜)因幡町縣教育會館に於て開催され、午前九時より十一時まで、新進七學徒の日頃の蘊蓄を傾けての研究發表を行ひ(研究發表の内容別記)午後一時より三時まで農學部囑託山川三郎氏蒐集の「刀劍及鍔」の展覽をなし、終つて三時より講演會開催、工學部谷村熈教授の「出雲傳來タタラ製鐵法に就て」及法文學部重松教授の「文化史上より觀たる歴山大王と成吉思汗」の二講演あり、終つて家庭食堂三階に晩餐會を行ひ和氣藹々裡に閉會した。研究發表會、展覽會及講演會共に會員のみならず一般來聽者多く近來稀に見る盛會であつた。尚講演會及研究發表會の内容梗概は演者自身を煩はした。御厚意を深く感謝する。

京旗の窮乏の過程に就て

江島壽雄

清朝入關建國の當初に旗地房屋を給與され生計の基礎が確立されたかに見えた旗人階級の窮乏はすでに順治年間に表れて來る。雍熙雍正となるにつれて一層甚しくなり、乾隆年間には侍衛にして他人に代つて役に當り、その賃貲を得て炊餐の用に充てる者すら見られるのである。嘉慶道光に至ると或は房屋を失つて浮居し、或は家人をして紡績を營ませて生計の不足を補ふ者の存在を思はしめ、甚しきに至つては旗人中竊盜・賣笑・賭博を行ひ、生活の資を求むる爲に高座舞臺に登つて唱歌優戲して賞賜を得る者さへ現はれる狀態となつた。咸・同以後此の狀態は一層惡化し、清朝末には旗人の子女は生計困難の爲、多くは賣淫を以て事とするに至つたのである。

かゝる旗人の窮乏は嘉慶以前は主に滿洲人の生活の向上・奢侈と固有の風習と人口の增加等に原因し、嘉慶以後はそれに加へて物價騰貴が强く作用して來る。尚其他二三の原因が考へられるが、以上の條件の下に彼等が窮乏して來た過程とは結局彼等の生計の基礎たる房地と錢糧とを失つて行く過程であると云へる。

奢侈、人口增加、或は吉凶諸事等による生計の膨脹を彼等は先づ旗地の典賣によつて補つた。かくして康熙二三十年以後下級旗人の多くは旗地を失つたのである。こゝに於て雍正七年、乾隆四年の旗地回贖の法が行はれたが、効果殆どなく、乾隆十年の御史赫泰の上奏には「至今而旗地之在民者十之五六矣。」と云つてゐる程であつた。乾隆・嘉慶・道光と物價騰貴著しく一方旗地を失つて益々窮乏の度を進めて來た貧乏旗人は次に房屋を典賣し、嘉慶年間には遂に最後の毎月の俸給をも高利貸の手に抑へられてしまつた。彼等は、毎月の生計困窮の爲、翌月

の錢糧を抵當として高利の借金をした。翌月の錢糧は受領の日既に高利貸によつて元利を引去られるので、その月の生計も亦當然不足した。彼等は累月高利貸の門を訪れなければならず、その間高利貸（兼商人）の米價操縦によつて一層の搾取が加へられ、彼等の窮乏に拍車をかけたのであつた。かゝる旗人階級の窮乏崩潰はやがて清朝の崩潰を意味するものであつた。

所謂「リスト・ルネサンス」に就いて

辛島重義

經濟學者フリードリヒ・リストのナチスに於ける復興を歴史的に見ようとして、先づナチスに於ける復興の意義を自由主義經濟學者のリスト無視の反駁とし獨逸自體の英吉利學説に對する反駁とを獨逸歴史學派經濟學者尊重とその再興の要因としてスミスからリストへの變遷をゾーデン・フイヒテ・ミュラーを通してリスト學説の樹立の歴史を概觀して、更に「著者が若し英吉利人であつたならばアダム・スミスの理論の根本原理を疑ふが如きは殆どなかつたであらう……」の彼の語を中心として「祖國の實狀と獨逸の利害關係」とが彼の所謂る「私の半生を書き付け」た「政治經濟學の國民的體系」を公にして世に問ふたリスト時代の獨逸を回想して、その次にリストの課題を國内産業のための統一的商品經濟地域の創出、そして内國關税撤廢と鐵道建設、國内市場に對する統一的關税壁の設置即ち彼の保護貿易主義の獨逸に於ける必然性に言及して、當時の官房學の旺盛とその持つPartikularismus傾向とこれに反對する獨逸統一主義の覺醒延いてはビスマルク帝國建設への一礎石としてのリストの歴史的地位に重要點を見出した。そして單に從來經濟史的にのみ見られるリストの獨逸史上に於ける意外にも重大な役割を認めるのである。メッテルニヒを毒りて云へば "Heroischer Schwindler"（英雄的山師）と呼ばれた彼がその國民經濟の國家性、彼に於けるマジャール問題、世界政策、祖國獨逸の彼の大獨逸主義精神の政治的發展が當時の彼に對する種々の毀譽褒貶に關係してゐた。リスト學説の特異性は先づ國民性の本質を認めない自由主義經濟學への反省、利益滿足を考察しない世界主義への反駁にあり、第二には國民の精神的・宗教的・現在未來の利益を確認して生産力を認識して物資力に反對してゐる點、第三には社會的勞働の本質協力の作用を誤認する自利主義個人主義的學説を痛烈に批判したのであつた。そしてリスト復興の三時期を考察して――即ちビスマルク帝國時代、世界大戰時代、ナチス時代――リスト時代の思想史的背景たるロマチツクと革命思想及保守主義、經濟思想的に見れば國民經濟確立と商業資本力の增大、汽車汽船電信等の科學上に於ける第二の發明發見時代の特質、技術的には機械應用の時代としての彼の生涯を通觀してリストに於ける古典的經濟學、特に重商主義、ナチス的保護貿易の現代的意義に言及した。

秋月藩海賀宮門著「賢己篇」、「草野私儀」小考

吉原　勝

戸原卯橋と竝稱される秋月藩勤王家海賀宮門には萬延元年三月三日直後の稿本「草野私儀」があるが「廟堂の大義、天下の大事務は各々其人有て其職を修む。草野の小臣は豈能く辨ずる事ならんや。又敢て公然と議すべき義ならんや」と私議せる正名の論説で二十七才の志士の文として不朽の史料であり、又「維新前史櫻田義舉錄」と軌を一にする十九士の辯護であり水藩の動向、天下雄藩公家の確執詳論至らざるなく身の行狀より始めて治國平天下の要を説き天子天孫一姓萬祀の國體尊重以外時艱克服し得ずとの確認が見える。「賢己篇」は櫻田門事件の直前二月の平靜寛厚の文章で十代藩公長元への上書と見られる。君の卷—臣の卷に分る。教育は人君を主體とすべきを説き露英佛の東洋侵略を説き日本の國難を警告し安政假條約を契機とする國内狀勢を慨き大名士大夫の覺悟を後花園天皇の御詔等を引照して人君は結局己を賢くするを以て政治の要道とし臣の卷にては人は幼少より教育を重視すべく學問事業不殊出効の本領發揮が窺はれる。當時の時弊を觀じては正理の國風の衰退と佛學天主教回教の興隆を警告して居る。臣道實踐の彼の主張は藩君へのみに止まらず日本國中の御儀は誠實恭敬の心を以てするといふ天皇歸一の發展となつて居る。以上二篇は對朝廷策の大義邀脱匡正、國内不一致への反省による天皇中心の即時新體制強化等相一致する。

中世の思想に於ける無の地位

西尾陽太郎

中世の思想に特異な性質を有つものに「無」の思想がある。中世文化の種々の方面にこの思想が採用されて吾國の思想を深めたといふ事が出來る。無の思想は勿論佛教の教理から由來してゐる、そしてそれが吾國民の生活に浸潤してゆき、一つの文化思想の基調となつたと考へられる。その過程は先づ平安朝の人生觀の規定から初まつた。現實に對する佛教的否定觀は即ちこの世のすべてを「無常」「無價値」なものと觀する事である。然し現實に「無」を觀することは同時に現實に對してゐる彼岸の世界、常住にしてすべてが聖なるものによつて價値付けられてゐる世界に憧れることである。この二つの世界は現實に生きる人々に對して種々なる努力によつて接近せしめられんとする。現實に淨土を見ようとするものは平安朝に於て著しかつた。然るに鎌倉新佛教に至れば、絶對他力の根柢に「信」の境地が力强く叫ばれ、この信を中に置いて教と證とが相即する。教を信じて行ふものに取つては現實の行爲即ち教の證でなければならぬ。この現實の身體は信ある唱名により直に佛身となる。換言すれば信あるところに現實は肯定せられて來る。又禪宗に於ても單なる否定は斷見と稱せられ、眞の悟りは否定を否定した所に開ける大きな肯定の世界であると考へられる。着衣

喫飯即ち佛行である。こゝに無の思想の大きな轉回が見られるが、かゝる肯定の成立はその根柢に無なる否定觀があつて初めて可能であり、無から有を生ずる關係が知られねばならぬ。解脫から悟道への精神的過程が中世に於て著しい、この思索傾向が中世に行はれていはゆる「道」なる思想を深め完成してゆく能樂、茶道などの諸藝道といはれるもの、武士道の如きすべてこの悟道的思索をその理論の基礎として有ち、それ故その妙なる境地に達する爲には一度無の世界に徹する事を要求されてゐる。この事に關して世阿彌の藝術論の例を引用した。東洋文化を考へる時この無の思想は重大な地位を有つといへる。

九州に及ぼせる支那影響

檜垣元吉

〔平安朝——近世初期〕

漢代・青銅器文化　筑前西岸。

六朝・裝飾古墳文化　有明海沿岸—筑後筑前。

〔支那に於ける社會的變動の影響。文化受容の門戸、交通路の時代的變遷。〕

大同　元　空海歸朝、博多の墨工常春園村田氏傳空海將來の鐵墨型を傳ふ。

弘仁　三　觀世音寺安樂寺武藏寺の儺鬼起る。應永年中迄存續。

承和　九　李處人肥前値嘉島に於て入唐船を造る。

貞觀　四　眞如親王入唐の爲張支信肥前柏島に於て船を造る

六　唐僧法惠を通事として觀世音寺に居らしむ。

一六　唐商崔及等三十六人肥前に來り歸化せんことを乞ふ。之を許す。

〔唐乾符元年、三十年後後梁—朱全忠開平元年〕

一八　肥前値嘉島に島司を置く。

仁和　元　唐商太宰府に到る。私に船載品を競買することを禁ず。

延喜　三　太宰府管内富豪の輩唐船來着の時價を踊して貿易するを禁ず。

天曆　三　肥前の僧日延天慶中入宋、吳越錢俶作寶篋印塔を携へて歸る。

天元—萬壽　謠曲「唐船」の祖慶官人の事蹟は此の頃。其の妻箱崎海門戸梅津氏の家後世バンバラ祭を行ふ。

〔宋末遼興起時代〕

寛仁　三　刀伊入寇、藤原隆家の西下せるは太宰府の唐醫によりて目を治せんとせしが爲なり。

永承　二　筑前清原守武私に入宋す。貨物を沒收し之を佐渡に流す。

長治　二　博多警固所鎰口吉任百濟惟助唐船入津を朝廷に申す。

天永　二　觀世音寺別當還宴交易物を以て業となし富千金を重ぬ。

永暦　元　勅願により肥後守平貞能八代郡妙見宮を宮地村に移す。我國妙見社の始と稱せらる。
（延暦十四同社上宮造營、白鳳九年大唐明州の津より龜蛇に駕し白木八千把村竹原津に着岸横嶽に鎭座と傳へ、今上宮と稱す）

安元　二　榮西宋より歸朝、今津誓願寺に在り、後博多に聖福寺開創。茶を呑振山及び聖福寺内に種ゆ。

文治　四　宗像一切經奥書に綱首張成、綱首李榮の名見ゆ。
〔南宋・西遼・夏・金對立時代〕

建久　元　原田種遠高祖城を築く。原田氏が其の祖を漢の高祖と稱するは居城の名に起因するか。

五　（宗像阿彌陀經石、宋光宗紹熙六年銘）

六　博多百堂亡び其の跡空地たり。—榮西言上書。

七　宗像阿彌陀經石來る。追銘承久二・嘉禎三。宗像大宮司氏國が其の母王氏（宋人か）の爲に輸入せるものか、銘文中の社頭寄進者張氏（參考博多灣發見張綱墨書銘明代烏天目茶碗）は氏國の妻か。文治四參照。（建保二宗像宮に香花燈料寄進、阿彌陀經石に追銘。）（建保六參照）

建仁　元　東大寺中門石獅子宋人字六郎等によりて造らる。宗像神社石造狛犬・玉取獅子銘。「奉施入宗像第三宮御寶前□建仁元年辛酉□藤原友房」—宋風石狛犬の北九州分布。

建保　六　博多船頭張光安箱崎宮留守行遍等に殺さる。

貞應　二　道元芝原四良左衞門の商船に乘じ博多を發し入宋

嘉禎　元　博多滿田助左衞門入宋。朱を燒く法を我國に傳ふ。嘉禎中滿田三右衞門宋より織法を傳へ博多織を始む。又曰ふ仁治二年歸朝すと。

仁治　三　宋人謝國明承天寺建立。
〔元・后海迷失元年〕

寛元　四　蘭溪道隆博多に着す。

寶治　元　西國米を宋に輸出することを禁ず。
〔文永弘安役〕

文保　中　可翁宗然入元留ること十年。歸朝後崇福寺に居る
（入元入宋守僧省略。）

正平　十　大明國使從仕郎山西行省都事允明盧墓（宗像鎭國寺）

正平廿三　中津絶海肥後高瀨津より明に航す。當時菊地氏對外的に活躍し高瀨伊倉丹部津に唐船來湊。
（八代神社—百濟淋聖太子を祀る。）
（百濟來地藏堂—傳日羅作地藏菩薩を祀る。）
（伊倉北八幡宮—郭氏奉獻麒麟香爐。）
（元和五伊倉郭公墓。）
（元和七玉水村林均吾墓等。）

廿四　博多聖福寺佛殿記。阿南陸人記す。
征西將軍宮明使楊載を卻け給ふ。征西府對明交渉

下略。

廿四　陳宗敬（號臺山）歸化、博多に住す。子孫透頂香を傳ふ。

〔明太祖洪武二年、元末明初時代〕

（元人陳祖田歸化子孫博多に在り醫を業とす。文明の頃京都に移る。）

建德　元　明使趙秩太宰府に來り明の建國を告げ寇人の綏撫を請ふ。

二　元僧放牛豐後直入郡岳麓寺を創む。

應永　八　義滿肥富祖阿を明に遣す。

十　明船博多に入る。

應永—文安　明人如雪歸化、九州に居り後相國寺に住す。

應永中兆殿司涅槃像を圖せんとし博多に赴いて名畫を模せんとす。

應永中明人館子一官眞如良蘆屋に來り釜を鑄る。—蘆屋釜。宋元鐵工業の影響・延德三參照。

此頃より博多港に於て拾得せりと稱せらるゝものに珠光青磁、博多文淋・博多金海あり。

享德　二　（博多の道安琉球王使として朝鮮に使す。）

文安　五　九州探題の聖福寺船明に赴く。

三　（「允澎入唐記」）

應仁　二　（「戊子入明記」）

文明　三　（「海東諸國記」）

十三　薩摩版「大學」刊行。薩摩版下略。

（明應八、山口版「論語」刊行。）

（正平廿二—元滅亡の前年—明の刮字工陳孟千陳白來朝應安三鎌倉に赴く。）

延德　三　須藤行重筑前高食神社毘舍文天、香月杉守宮鐵鳥居等鑄造。

永正　三　明人紅令民南京釜を齎し唐式製茶を始む。嬉野茶園の起。

大永　六　（明僧如定肥前川上社の大楠を嘆賞。）

（博多市小路明人墓。）

神谷壽貞等石見銀山採掘。入明して採鑛法を學べるなり。

（天正中住友理右衞門堺の南蠻人白水より銅金分析の術を學ぶ。）

天文　十　松浦隆信福江に據れる明人王直（五峯大船主）を平戸に招く。王直は弘治三明將胡宗憲の爲に捕殺せらる。

十一　明船平戸に入る。男子は海盜となり女子は傾城となり人口減ずと稱せらる。

廿二　（倭寇大舉江南を侵し南京より福建に到る。）

天文中金持重弘大內氏の命により入明針灸を學ぶ。

天文中博多銹の製法を傳ふ。

永祿　元　（ジェスイット博多會堂成る。）
　　三　明儒江夏友賢薩摩に入り島津氏に仕ふ。
　　十一　肥後繁根木八幡補陀落（上海の南方舟山列島）渡海の碑。
文祿　中　（嬉野通直朝鮮の役に從ひ虎を搏つて名あり。通直呂宋にありしこと六年なり。）
慶長　初　明人雲貞翁蜀郡白水縣より博多に來り白水を以て姓とす。七世由良安永八年後桃園天皇の宸脈を診す。
　　五　黑田長政博多の海外貿易に着目し五十二萬石に甘んじて入國すと傳ふ。

國民學校に於ける國史教育

伊藤　弘

國民學校の國史教育を擔當する國民科國史は國民學校令及び施行規則特に國民科、並國民科國史の目的に基けば、國體の精華を皇國發展の跡に即して闡明する所に獨自の立場を有ち、之によつて無窮に發展する皇國の大生命を感得せしめ、皇國臣民たるの自覺を深めしめて、世界に於ける我が歷史的使命の遂行に資することを任務とするのである。

そして實際教授に當つて從來より一層强調さるべき點は

1、肇國の精神の展開具現たる國史を理解せしめ、國史を貫く尊嚴なる皇室の存在を認識徹底させること。

2、我國文化の獨自性を明かにして其の創造發展に努むる精神を養ふこと。

3、東亞及世界の大勢を明かにし皇國の地位と使命とを自覺させること。

4、自己が歷史的傳統に生くる歷史的存在なることを自覺せしめ傳統意識を啓培することの諸點である。此等の點は教材の選擇、或はその取扱に於ても注意されねばならぬ。追つて出來上る教科書は此等の點が充分參酌されねばならない。現行教科書は昨年四月並本年四月修正されたるものであるが、小學國史教師用書上卷の修正と共に右の趣旨を具體化せることが認められ又昨年上卷及び本年六月中卷を上梓せる文部省の師範國史の內容を按ずるに以上の趣旨が充分窺はるゝことは當然である。

尙研究發表會には新に九州史學會に入會された新任福岡高等學校教授今來陸郎氏の「神聖羅馬帝國とハインリッヒ獅子公」と題する日頃の蘊蓄を傾けての御研究の發表があつたが、既に「社會經濟史學」九月號に掲載の事と決定したので、この概要はこゝには割愛することゝした。何卒「社會經濟史學」に就いて觀られんことを切望する。

國史學會

昭和十六年度新入生歡迎遠足會

五月四日（日曜）新入生歡迎遠足會を決行。當日午前八時省

線吉塚驛集合、長沼、竹岡、鏡山の三先生、榊原先輩を始め、波多野助手、田村副手、阿部、杉本、伍賀、中林、宮下、及び新入生の古賀、渡邊、上杉、片山の諸氏參加、先づ汽車にて宇美に到り、宇美八幡宮に參拜、それより新綠の香を縫つて四王寺山に登る。途中鏡山先生より百間石垣の說明を聞き、頂上に達して城址、寺址を見學、折柄の快晴に黃色な菜種畠の筑紫平野は一眸の內におさまる。やがて道を太宰府町にとつて下山、長沼先生宅にて一同晝食の饗應にあづかる。先生宅を辭して太宰府天滿宮に參拜、電車で天神町に歸つたのは午後五時であつた。

昭和十六年度第一回例會

六月十二日（木曜）第一演習室にて鏡山先生及び田村副手の研究發表あり。題目並に內容梗概を左に揭ぐ。

樂浪古墳發掘談

鏡山　猛

朝鮮總督府の樂浪古墳調査事業は、連年東亞に於ける支那漢文化の新資料を累加しつゝあるが、本年度の發掘は去る五月十日より一ヶ月餘に亘つて行はれた。私はその調査に參加し得たので發掘の概要を傳へ、作業起居に關して餘談を試みた。今回の調査に撰定された古墳は貞柏里及び石巖里の六基に及んだが私の主として關係したのは貞柏里一二五號墳及び一三六號墳であつた。前者は發掘の結果盜掘に遭つた石槨墳である事が明になつたので、主力を後者に注いだ。同墳は木槨、木棺の材が大部分腐朽を免かれてゐたので、その構築埋葬の大要を知る事が出來た。槨は東西二米南北三米餘あり、槨內に並置された棺二個と棺邊に多數の殉葬品とを檢出し得た。棺內には銀製指輪各々一個と、玻璃製小玉若干あり、棺の北邊には夥しい土器及び漆器類が列び、西邊には漆器類の他に鏡鑑二面青銅製の刀裝具木製斧、帶鉤等が配せられてゐた。漆器は完形を保つものは多くはなかつたが案、盤、耳杯等多數あり、內に「王氏窄」「張窄」其他の銘記を有するものが見受けられ、又把手付コップ形容器は珍奇な新例として注目された。一行の調査は猶石巖里方面で繼續中であつたが、私は關係調査と見學を了つて六月三日平壤を引き上げた。

本居宣長の復古思想

田村圓澄

復古思想は、國學の重要な一要素をなしてゐると謂はれる。「古へをおのが心言にならはし得たらんとき、身こそ後の世にあれ、心ことばは上つ代にかへらざらめや」と語る加茂眞淵はたしかに復古の立場に立つてゐた。しかし哥詠の理想を古代に求め、古代に似せんとするのが國學に於ける復古思想であるとするならば、本居宣長は、香川景樹と同じく反復古主義を堅持してゐたことになるであらう。同一の哥を古風とし後世風とし近世風たらしめる歷史の支配を信ずる宣長には、眞淵の如き意

味の復古思想は見出されない。

では果して宣長の國學は、復古思想を含まないのであらうか。——

宣長の復古の問題は、哥詠にあるのではなくしてこの現實にある。彼はこの現實を支配する神の御所爲を信じた。世の中の一切の推移は、よかれあしかれ神の御所爲である。我々人間に許されるのは、この現實を改變することではなくして、「有り來りたるまゝの形を頽さず、跡を守りて執行ふ」ことである。そして宣長のこの見解が、幕府の存在を肯定するに到つたことは云ふ迄もない。宣長は一方で尊皇の道を明らかにし乍ら、他面、幕府政治を肯定した。ここに宣長の矛盾がある。また國學そのものの實踐性の缺如がある。……現在に於ける宣長研究の多くは、宣長の思想に對して、かかる批判を下すに躊躇しない。

しかし宣長によれば、幕府の施政は「天照大御神の御はからひ、朝廷の御任」であり、その故に宣長の如き下々の者の云々するところではなかつた。彼が幕府の存在を容認したのは、それが朝廷の御任であるからである。即ち朝廷によつて許されてゐるが故に、江戸幕府は彼によつて肯定せられるのである。しかも宣長は、江戸幕府の存在に對して一つの道理を見出した。それは、尊皇の道こそ幕府の依據すべき道理だといふことである。しかもその尊皇の道は、幕府自身が、その幕府的性格を無くする以外にはない。——虛心坦懷に『玉くしげ』『秘本玉くしげ』を讀む者は、何人といへどもこの自覺に到達するであらう。

宣長は尊皇の道のみを明らかにしたが、倒幕を說かなかつた。が、これは正しい。我國に於いては、倒幕の大命はただ朝廷からのみ發せられるのである。その大命をまたずに倒幕を叫び、倒幕の行動を敢てするならば、それは內亂と何らえらぶところがないであらう。

尊皇の道を明らかにすることによつて、宣長の業績は永遠なるものにつながつてゐる。倒幕の理論は、倒幕の事業が成就すればもはや無用になるかも知れない。が尊皇の道こそ「日月の天にましますかぎり、天地のかはらざるかぎり」無窮に傳統するものである。しかも宣長は自らこの道をつくつたのではない。それは既に神代に於いて、神によつてつくられた大いなる事實であつた。だから尊皇の道は同時に神の道なのである。宣長はこの現實の根抵を貫くところの古くして且つ新しい神の道を自覺したのである。

かく見ることによつて我々は、宣長の復古思想を正當に理解し得るであらう。復古するとは古代人の生活を模倣することではなく、また古代人の心情に憧れることでもない。却つて古代より傳はる神の道に歸一することである。しかも神の道の嚮ふところにのみ日本の進路がある。してみれば復古するとはまさに未來に進むことに外ならない。しかも復古は、宣長によれば政治組織や社會制度の變革を意味するのではなくして、實に我

々の態度心構への問題であつた。朝廷を崇び、神の御心を心とすることにより、不斷に復古は實踐されてゆく。そして名も無き人々の不斷の復古は、やがて日本を不斷に發展せしめることになるのであつた。古代はこの故に、宣長にとつては、彼の歸らんとした目標ではなくして、却つて彼を進ましめる光であつたのである。

昭和十六年度第一回實地見學

七月六日（日曜）佐賀縣佐賀郡久保泉村に向ふ。鏡山先生始め、田村副手、伍賀、古賀、渡邊、橋田（經濟科學生）の諸氏參加。松尾禎作氏の案内により、最近發見せられし帶隈山の神籠石を見學す。（これについては鏡山先生の御紹介あり）歸途佐賀市へ出で、同地の徴古館を參觀す。午后六時、博多驛前にて散會。

昭和十六年度第二回實地見學

七月九日（水曜）十二日（土曜）十四日（月曜）の三日に渉り、水城村國分寺窯址の發掘調査をなす。鏡山先生、伍賀、古賀、渡邊、橋田の諸氏參加、第三日目には天延三年在銘の平瓦を發掘した。

昭和十六年第三回實地見學

九月廿一日（日曜）雷山登山決行、午前八時三十分、今川橋集合、鏡山先生、波多野助手、田村副手、中林、上杉、片山、渡邊の諸氏參加、バスにて前原に到り、それより徒歩にて山頂の大悲王院に着く。同院にて國寶千手千眼觀世音菩薩立像並に清賀上人坐像を拜觀し、又、古文書の調査をする。午后三時半同院を辭し、神籠石を見學、水門を通つて下山す。再び前原まで歩き、バスにて午后八時今川橋着、散會す。

昭和十六年度第二回例會

十月九日（木曜）午后一時、第三演習室にて開催。長沼、竹岡、鏡山の三先生始め、波多野副手、田村副手以下全學生出席阿部光章氏の研究發表あり、題目及び内容梗概を左に掲ぐ。

淨土教成立の一考察

阿部光章

永遠的な理想世界としての淨土への信仰に教理的基礎を與へ淨土教成立の先驅をなした人は言ふ迄もなく源信である。

源信の淨土信仰は往生要集の序文にも見られるが如き苦い生活體驗とそれより歸納された厭離穢土、欣求淨土といふ彼の深い宗教的感情によるものである事は言ふ迄もない。

それには現實に對する嚴しき批判と痛烈な自己反省を通して獲得された尊い宗教的體驗を見るべきだと思ふが一方此の淨土信仰が歡迎された貴族社會の人々には現實に對する激しい苦惱による現實否定を通して得られるが如き崇高なものでなかつた事は明らかである、然ればその受容態度とはどんなものであつたらうか、此れを明らかにする事が淨土教成立發展の基礎を把む事である、此の受容態度の根底をなすものこそ延喜、天曆時

代を中心として新に社會の表面に動き出して來た新思想傾向の持つ唯美主義的傾向と廣義の浪漫主義とも稱すべき思想傾向の二つである。

此の高度に發達した美的文化と低い知的文化の激しい跛行狀態より起る一種のアンニュイとも言ふべき憂鬱さを含んだ唯美主義的傾向は菩薩來迎、淨土の莊嚴等を說く往生要集を通して美的理想界としての淨土に憧れると共に彼等の持つ經濟力を利用して地上淨土建設を目指し美的滿足感に包まれんとした事は容易に了解される。

又一方歷史的、傳統的なものを重んじ、又人生に對してこまやかな感得力を持つ感性的方面が重視される非合理主義、反主智主義的傾向の示す如き浪漫主義的傾向の特徵として考へられるのは非現實的の觀念界への憧憬である、此れが現實の否定—(本來のより善い世界)來世(淨土)への崇仰讃嘆を說く淨土敎への歸依と結びついたのは彼等の憧憬が結局何等かの形式的中心を必要としたからである。

以上の二者が結びつく所に淨土敎は勢力を得て來ると共にそれがあく迄も貴族階級の淨土敎であつた所に彼等自らの限界もあつたのである、即ち現世的な物質的幸福に惠まれた彼等の浪漫的思想が一面非常に觀念的であると共に他面その現象化、形體化を切實に望んだからである。此處に彼等の淨土信仰の特徵が見られると共に又歷史的に一個の完結性を有してゐた事も判るのである。

昭和十六年度第四回實地見學

十一月三日(明治節)高良山見學。午前八時三十分、天神町九鐵待合所集合、鏡山先生始め波多野助手、田村副手、伍賀、中林、宮下、古賀、片山、渡邊、上杉、清松(國文科學生)の諸氏參加、電車にて久留米に到り、直に高良山に向ふ。神籠石の列石に沿つて秋深き山腹を一周し、高良神社に詣でる。社務所にて晝食後、國寶「平家物語」寫本を始め、平安時代の神名帳、室町時代の境內圖、その他古文書寶物を拜觀する。午后二時、社務所を辭して下山、久留米市に引き返し、梅林寺、水天宮に參詣、更に日輪寺古墳を見學する。午后六時福岡歸着、散會した。

日本文化講義

學生課主催にかゝる第六十八回日本文化講義は、十一月九日(日曜)怡土城址にて開催、鏡山講師の「上代の西海防衞」と題する臨地講演あり、續いて同講師の指導案內により、土壘望樓址を見學、高祖山頂の上城址を通つて三時下山す。更に一同は丸隈山古墳にも立寄り、博多驛へ歸着したのが午后四時。當日は折柄の快晴に惠まれ、會するもの五十餘名に及び非常な盛會であつた(田村副手記)

東洋研究會發會式兼第一回研究會

一、期日　昭和十六年六月二十日(自午後一時)
一、場所　於第五演習室

一、研究發表
　1、旗田氏「滿洲八旗の成立過程に關する一考察」に就ての紹介　　江島壽雄
　2、「大延璘の叛亂と化女直に就て」　　日野助教授
　3、「漢代の法家に就て」　　重松教授
一、質問、批評、座談

西洋史學研究會

西洋史學研究會は昭和十五年度第二學期には臨時講義に九州に御來臨になつた大類伸先生を迎へて前教授長壽吉先生にも御出を願つて演習室に開催、其後新たに昭和十六年四月より福高教授に轉任された今來陸郎氏を迎へて五月演習室に、九月には十六年度第一學期にやはり臨時講義に見えられた山中謙二先生を迎へて讀書會を開催、近着雜誌の紹介を行つた。紹介概要は左記の如くである。

—Le catholicisme allemand dans l'Etat national-socialiste.（ナチスに於けるカトリック主義）

辛島重義

獨逸教會の運命を中世紀に溯つて理解しようとする著者は先づ中世の Eigenkirche を回想しルッターのテーゼはこの Eigenkirche の精神の反復とし、イスパニアとの關係のあつた Habsbourg 家と共にカトリックは獨逸に偉大な勢力を占めるに至つた。（cujus regio, ejus religio）の諺の如く virus étatisme が相伴つて輸入されたとは云へカトリックは偉れた武器とし、佛革命當時には反革命的なもの、反佛的なものとして考へられ、中世への憧憬、青い花への探求、絶對的な ordre への尊敬、Furor teutonicus, 信仰保護者への崇拜がロマンチストの間に集約してゐた。Vormärz 期には教會の國家への服從は完全であり、この傾向に反對するものは Gunther, Bolzano, Döllinger 等であつた。それでカトリックの復興は étatisme の稀薄な地域から起り Schleiermacher, Stahl 殊に Droste 等である。Universalisme catholique と Weltanschauung germanique との間から恐るべき鬪爭が起る。この間に Zentrum が誕生する。而して中央黨は政治的色彩へと押進めて ultramontains は mauvais citoyen と考へられ、中央黨は Trumpf として强大な勢力として鐵血宰相に反對するに至つた。ホーヘンツオランの下ではカトリックはプロイセンの étatisme に大戰後は étatisme marxiste に影響を及ぼして既成の官黨への服從と反抗との二途を持ち、一は妥協を他は文化鬪爭を更新したのであつた。しかし中央黨はその收め得た成功に對して不幸の事件が續出した。Matthias Erzberger 事件であつた。そしてこの情勢の中に一九三三年 Adolf Hitler が政權を得た時人々はこの事件の結果を豫知し得なかつた。司教制が廢止され他は以前の共和派に代つてナチと妥協した。一九二

〇年二月廿四日の二十五條テーゼの第廿四條はドグマを留保せられ教會の反抗を起す、しかしこゝには positiver Christianismus を尊敬するとある。しかし今や一九三二年の絶對多數は既に顧みるよすがもなかつたが、反對は强烈であつた。この點ナチも幾分これに影響されてゐる。

ナチに於てはローマに對しては破門された關係となつてゐるヒトラーを唯一の首長としゲベルスを宣傳相とするナチは三人のカトリックを持つ。即ち Othmar Spann は黨の資金部に、Carl Schmitt-Dorotitch は民法學者として、Josef Nadler は獨逸史學者として。第一は全體主義の父親として Ganzheit-Lehre を首唱し、第二は第三國家の憲法起草者であり、第三のナードラーは Neu-Stämme と Alt-Stämme の發見者である。そして一九二二年七月二十日光輝ある中央黨は終滅した。そしてユダヤ迫害と共にカトリック迫害が起つたのであつた。一九三八年獨墺合邦により司教と牧師とは一般人に附與され、昔て Katholisch ist Trumpf と呼ばれたカトリックはナチ世界には存在しなくなつたのであつた。

Marcel Dunan, L' Alliance Franco-bavaroise de 1805. La naissance de l'Allemagne napoléonienne. A propos d'un livre récent. (Revue hist. 65e ann. (1940) t. 188 (janv-mars.) pp. 105—111 (一八〇五年のフランス・バヴリア同盟、佛史學雜誌、一九四〇年、第一號所載)

辛島重義

一八〇五年のフランス・バヴリア同盟、即ちヴエストフアーレン條約以來のフランス諸王の傳統に復歸し、ナポレオンの所謂「第三ドイツ」實現の種々の努力の出發點はゲルマニア世界の內部の歷史並びにラテン的西部との關係の歷史の著しい時期である。政治的には反革命同盟—革命フランスに對する—に終末をつけ、軍事的にはナポレオンに彼がエヂプト遠征以來夢みてゐた Danube の belle campagne の舞臺を提供し、佛國民にはヴインの覇權に對する決定的な攻擊手段を與へ、翌一八〇六年のライン同盟の根底をなすものである。この同盟は Bignon, Thiers-Armand, Lefebvre 等の佛史學者、更に又 Moriggl, Schönhals, Wertheimer, Fournier, Häusser, Perthes, Treitschke 等の獨墺派史學者の對立となる。この感情的理論對立に、Richard Ledermann は一九〇一年 Der Anschluss Bayerns an Frankreich im Jahre 1805. を主として佛蘭西文書によつて研究し、Michael Doeberl は Maximilian Joseph と Montgelas とを、ビスマルク帝國により始めて崩壞した王國「近代バヴリア」即ちナチス出現により消失した「自由國」の創建者とした。(Entwicklungsgesch. Bayerns, 1912, 1928)

元來此問題に關する資料は Alombert-Colin が一九〇二—

〇八年に六卷の中四卷に亘る所の La campagne de 1805 en Allemagne に錄され、documentation と argumentation に勝れたのは Josef Gmeinweiser, Die bayer. Politik im Jahre 1805. (1928) である。この著に啓發されて Hans Karl von Zwehl がナポレオン時代バヴリアの兩立者 Max. Joseph と Montgelas の相互役割を從來學說から根本的に變じたのである。Zwehl 著 Der Kampf um Bayern 1805, I: Der Abschluss der bayer.-franz. Allianz. Mün. 1937. in 8°, xiv+247. に據れば Max. Joseph IV. はお人好しで誠意で人民的な輕薄な不確定な「常に躊躇し、人の言に左右される」人であつた。この缺點を補ふものが Montgelas である。彼は元來敎養上フランス人でサヴオアから出た人である。一八一七年失脚迄前後十九年間外交事務を掌り、又財務內務にも關係してゐる。彼はフランスの援助によつて Wittelsbach 家の雜多な新舊領土を行政處分し統一し、又 sécularisation 又 médiatisation により古い社會特權を中央集權下に糾合して新國家を作る努力を試みてゐた。Zwehl の所據は當時ミュンヘンへの佛使節 Otto の報告書である。これは古く Ledermann, Alombert-Colin, Driault 等も所據してゐるが、その取扱は全く新しい。因に Louis-Guillaume Otto (1754—1817) はバーデン大公國の創始者でルイ十六世以來の佛の外交官で、革命時代にも外交官であつた。さて上述の Joseph と Montgelas の關係から一八〇二—〇三年の récès 時代頃から佛とバヴリアの接近は計畫されてゐた。社會的政治的集中は München と Wien を次第に分離して Max. Joseph は己れを崩壞せしめる塊と、隣人として自己の家を保護して主權的地位を與へる佛との間に立つて一八〇五年佛との盟約を結ぶことゝなつたのである。

Paul Gerhardt, Grimmelshausens Reichsidee (Die Literatur, 43 Jahrg. Heft 6, März 1941)
（グリンメルスハウゼンのライヒスイデー）

本多四郎

「Grimmelshausen がその小說 Der abenteuerliche Simplicissimus に於て、三十年戰役によつて齎された災害に對する一般的提議をなす限りに於ては、それは純粹に社會的な、あくまで非政治的な刻印である」「かゝる社會改革の思想及びその手段はその小說の最初の五卷に於て夥しく見出される」併しこゝに注意さるべきことは、「その尨大な詩の若干の章句に於て……未來の teutsches Reich を考へ、それを多くの統一體に描出せんと意圖してゐることである。彼の作品の第三卷の第四第五章に於て、未來の teutsches Reich に對して提出された試案は、かゝる偉大な大膽な考へに關するものである」

ジュピターの神は Simplicissimus に彼の抱く平和の理想を次の整序に從つて講述する。(1) Der „teutsche Held" (2) Des „teutschen Helden" Kampfweise (3) Die politische Reformen (4) Die Herstellung gleicher Rechte und Pflichten

(5) Der Kulturelle Aufbau (6) Die Konfessionellen Reformen (7) Des „teutschen" Reichs europäische Sendung

要約すれば「神に造られた英雄によつて、内政的には流血を見ずして諸都市の優越の基礎の上に統一されたドイツ國民、しかも同一地域に於ては關税障壁なく、品位ある首都によつて代表される。もはや格級的戰役や宗派的爭論によつて破壞されず、文化的には高度の發展をとげる。又外政的にはヨーロッパの指導的大勢力として認められる。——これが Grimmelshausen のライヒスイデーである」

「Grimmelshausen の考へは現在にとつては實際的價値を有さない。だが過去の嚴密な歴史的觀察には高度の重要性を有する。それはわれわれの民族の中にたえずいきいきと生成するライヒスイデーの十七世紀に於ける詩的證明である」而もそこには僅ながら封建社會を否定し、有害な宗派爭論を否定する際に十八世紀の Vernunft への移行が認めらるのである。

H. V. S. Ogden, The state of nature and the decline of Lockian political theory in England 1760–1800 (The American Historical Review, vol. XLVI, No. 1, Oct. 1940)

（自然狀態とロック的政治理論の衰微）

本多四郎

本論文は標題の示す如く、the state of nature といふ概念が十八世紀の經過とともに、幾多の迂餘曲折を經ながら衰退し、そしてそのことがイギリスの政治思想の變化にいかなる役割を演じたかといふことを論究せんと試みるものである。即ち abstract な juristic な自然狀態概念を奉ずるロック説が、historical な sociological な自然狀態概念を假説とするルーソオ説を契機として修正を餘儀なくされ、遂にはこの二つの radical democracy も世紀の改まると共に、Burke, Paley, Bentham 等の Utilitarianism によつて否定され、こゝにイギリスの政治思想の流れは十八世紀の末年に一大轉換を遂ぐるに至つたと結論する。

さてルーソオの The Second Discourse は最始イギリスに於ていかなる態度で迎へられたのであらうか。それは最始決して歡迎されたわけではなく、寧ろ彼の自然狀態は不合理なものと考へられ、その the antithesis of nature and art は拒否された。

次いで一七七〇年代の Radicals 即ち Jackson Barwis, Matthew Robinson Morris, Granville Sharp, Richard Price 等はルーソオ的概念を援用することによつて自己の説を修正しながらも、あくまでロック的傳統に立つて自然權を主張した。從つて彼等のルーソオに對する態度は必ずしも友好的ではなかつた。

これに對立する Antiradicals は自然狀態に對する態度の相違によつて二つのグループに分けられる。併し自然權を排擊せ

んとする點に於て兩者は一致する。先づ一七七〇年代の自然狀態を容認する Joseph Wimpey, John William Fletscher 等は、新しいルーソオ的概念を利用することによつて自然權を拒否せんと志した。これに對して一七八〇年代の Soame Jenyns, Josiah Tucker 等は自然狀態及び the antithesis of nature and art を否定することによつて自然權を攻擊しようと試みた。

ところが一七九〇年代に入ると、Thomas Paine がロック的傳統に立つて Rights of Man 1791 を主張した。そこで Anti-radicals 就中 Edmund Burke, Richard Hey, Irish Pamphlet 等はこれに反駁し、遂にはルーソオ及びロックの契約說そのものを全く否定するに至つた。かくて道は功利主義者へと通ずるのであるが、彼等は自然狀態に關する考へを明白に發表してゐない爲に、こゝでは割愛されてゐる。

要するに論者が、「變化した自然狀態概念が、イギリスに於て十八世紀の後半を通じて起つた政治思想の變革に於ける唯一の或は最も重要な要素でなかつたといふことは云ふ迄もない。…併しながら現實的な變化を齎したところの pattern は、主として自然狀態及び自然と作爲との對立を包含するところの論爭によつて決定されたのである。しかもこれらの論爭は、他のどの書物よりもまさつて The Second Discourse によつて惹起されたのであるから、我々はルーソオの論文に對して、イギリスに於ける自然權說崩壞の一般的 pattern を決定するに當つての支配的な影響力を正當に附與することが出來るのである」と語る如く、自然權說の崩壞に於ける自然狀態概念の役割別してルーソオの新概念の意義を主張せんとするものである。

この方面の研究の比較的乏しい折から、自然狀態概念の二つのタイプを明瞭にし、ルーソオ的新概念を媒介とすることによつて、自然權說の崩壞を見ようとするのは、多くの敎示と興味を與へるものと云へよう。

Edward L. Schaub, J. G. Fichte and Anti-Semitism (Philosophical Review, vol. XLIX, No. 1, Jan. 1940, pp. 37–52)

（フイヒテと反セミテイズム）

本多四郎

ユダヤ問題は現今の史學界、特にナチス史學に於ては、極めて重要な課題の一つをなすものである。こゝに紹介される論文は昨年米國に於て發表されたものだけに自ら興味深いものがあらう。猶ほ Edward Lorey Schaub は North Western Uni. の哲學敎授であり、Philosophy today 1928 の著によつて知られてゐる。

論者はフイヒテが通常反ユダヤ主義者と目される根據となる一七九三年の反ユダヤ論說をとりあげ、成程それは極端なる反ユダヤ主義を標榜するものには相違ないが、果してそのまゝ受容れられてよいものか否かを吟味し、結局それは云はゞ一つの

エピソードに過ぎないものであることを論證し、以てフイヒテが必ずしも反ユダヤ主義者でなかつた所以を明瞭にせんと試みる。

論者は Theodor Fritsch が、その著 Handbuch der Judenfrage : Die wichtigsten Tatsachen zur Beurteilung des jüdigen Volkes に於て、フイヒテを反ユダヤ主義のイデオローグと見做してゐるのに反對して、次の三つの設問にわたつて解答を與へんとする。

先づフイヒテの反ユダヤ論說はフイヒテに關する限りいかなる妥當性を有するか。又いかなる範圍に於て、いかなる根據に基いて記述されたのであるか。これに對しては、フイヒテは感情的興奮の際とか、道德的理想に熱中してゐる際には、往々哲學者としての冷靜と熟慮を缺くことあり、又彼が政治的動亂、思想的變革の中に生涯を送らなければならなかつた關係上、彼の思想乃至は內面生活には絕えず變動が繼起し、爲に abnormal な精神狀態が起り勝ちであつたことが留意されねばならないとする。

さて問題となるのは一七九三年の Beiträge zur Berichtigung und der Urteile des Publicums über die französischen Revolution であるが、Asher は同年 Eisenmenger der Zweite : Nebst einem vorangesetzten Sendschreiben an den Herrn Professor Fichte in Jena を公にして、フイヒテを反ユダヤ主義者として擁護したのに對して、Levy は Fichte und die Juden に於てこれに反對した。かゝる論爭のあとをうけて、論者は Beiträge は畢竟個人的、社會的理由よりして、冷靜な批判的思索の缺除より生じた abnormal な所產であると斷定し、從つて或種の限界のもとに理解されねばならないと主張する。

次にフイヒテは個人的にはユダヤ人に對していかなる態度をとつたか。又これに關聯してどういふ生活原理を抱いてゐたか。これに對しては、フイヒテは個人的にはユダヤ人との間に何らの不和軋轢はなく、寧ろ數々の親交を結び、時には彼等を擁護するやうな場合もあつたことを指摘し、又彼の生活は宗教的道德的理想に導かれ、萬人の自由と平等とを希願してゐたことが答へられる。

最後に對ユダヤ人の差別的法律或は行爲と彼の國家觀との關係であるが、彼にとつては國民は云はゞ文化的國民であり、Die Staatslehre, oder über das Verhältniss des Urstaats zum Vernunftreiche に於ける王國は自由と平等に立脚すべき正義の王國である。かゝる國家觀のもとに於てはユダヤ人に對する差別的待遇の依據すべき理論的根據の存する餘地はない。

かくて論者は次の如く結論する。「フイヒテには、彼の個人的特徵よりして、冷靜な批判的な思想や、熟考された言論への道を塞ぐ激情と熱中とを考慮に入れなければ說明され得ない事態が生涯を通じて點綴してゐた。一七九三年の Beiträge の反ユダヤ論說もこの中に入れられなければならない」と。

北九州考古學會

北九州に於ける古代遺蹟及び遺物の新發見

一、肥前帶隈山神籠石

佐賀縣佐賀郡久保泉村字小城内に溜池工事が昨年より行はれてゐたが、現場の技手石井龜吉氏によつて池淵に花崗岩の切石が並列してゐる事が注意され、之が神籠石の遺蹟である事が確認された。神籠石は筑前の雷山、鹿毛馬、筑後の高良山、女山豐前の御所ケ谷周防の石城山の六ケ所が數へられ、それが築營の目的には神域説、城郭説等あつて、往年の史學界を賑した問題であつたが、茲に一新例を加へ、遺蹟の再檢討が要望されるに至つた。當遺蹟では未だその全貌が明にされてゐないが、有明北岸の佐賀平野を展望する景勝の帶隈山の南麓に蜒々と連る列石があり、水門阯も二ケ所推定される。我が國史研究室の有志も去る七月六日基山國民學校長松尾禎作氏の東道によつて實地踏査を試み、更に精査の計劃をたてた。

二、平安初期の有銘梵鐘

筑前早良郡内野村にある西光寺の鐘樓に、平安初頭承和六年の銘ある梵鐘が架けられてゐる事が世に公にされたのは舊臘の事であつた。鐘の大さは全高四尺四寸四分、口外徑二尺五寸五分に及び、銘は次の如く池ノ間一區に鑄出されてゐる。

承和六年鴨部立造　　便伯者國金石寺鐘
守護三寶及□□□　　十八善神深砂大將
若貧欲者有犯用心　　必滅其身亦子孫類
廻向聖朝國吏廳衆　　伽藍恒久佛法興隆
一家繁昌萬代全保　　法界□□□□利益

鐘の形や字體も平安初期の特徴を示し、特に龍頭は口を左右に突出せしめる珍奇なものである。銘文によつて明かなる如くこの鐘は元來伯者國金石寺にあつたものであるが、この寺は未だ明にされてゐない、西光寺に傳へられる書類によると永祿二年出雲の多福寺に移され、明治二十二年賣却せられて大阪に出たのを、寺の先住が購められて西光寺に移されたものといふ傳來が明にされてゐる、年號銘を有する梵鐘としては我國第四の古鐘である。寺では目夕常用の鐘の由來を明にして、取扱に注意すると共に、國寶申請中である。

三、筑前國分寺の瓦窯

福岡縣筑紫郡水城村の筑前國分寺には、創建當時の瓦を燒いた窯があつて、史蹟に指定せられてゐるが、今回新に平安時代寺の修覆に用ひられたと推定される瓦窯が發見された。その位置は寺の南方約五百米突の地點にあたる山林中にあり、長さ約十三尺の登り窯である。國史研究室有志は水城村國民學校の援助を受けて、去る七月九日より十四日に亘つて發掘調査を行ひ大きな收獲をあげた。天井一部の落盤ある外、焚口より煙出に至るまで完全な形を保存してゐる。窯内發見の瓦片には「筑前」「介」「佐」等の押型銘があるものを交へ、特に「天延三年」の銘あるも平瓦破片は造瓦の年代を知るものとして最も貴

重な採集品であつた。現在國分寺には「天延三年七月七日」の押型銘あるほゞ完全な平瓦を藏してゐる。

四、太宰府四王寺山の經筒

太宰府の四王寺山は天智天皇の御代築かれた朝鮮式山城大野城の所在地であるが、奈良朝末に四天王が城域に奉祀されこの名が起つた。平安時代を通じて西海の佛蹟として顯れる所であるが、既往山中より經筒發掘される事多く、その一部は國寶に指定されてゐる、最近村民による盜掘が檢擧され、四個の經筒が明みに出された。その一つには「大日本國永久二年十一月二日癸酉筑前管御笠郡安樂寺」云々の刻銘あるものがあり、青磁埦、刀子等を副へ筒は素燒の甕の中に容れられて埋められてゐたといふ。又一個は相輪のある蓋を持ち瓔珞が垂下され、筒身は二段の積上式の優品であつた。何れも藤原時代の遺品と思はれ、この地方の佛教文化の普及を示す資料として貴重なものであつた。

（鏡山）

近刊書紹介

武藤長藏博士著「日英交通史之研究」の改訂增補第二版の出版について

長崎高商名譽教授武藤長藏博士は先に昭和十二年「日英交通史之研究」を發表せられたが、こゝに本年一月新たに改訂增補を加へて第二版の出版を見るに至つた。

今尙、長崎高商に講師として子弟の訓育に當られつゝ、老年增々學究的研鑽に勵まれつゝある博士に對し滿腔の敬意を表すると共に、現今東亞共榮圈の確立に邁進し對英國策の最も重大なる我國にとり誠に慶ぶべき事である。博士の歷史家としての態度はその第二版の自序によれば純學術的なる立場を堅持すると共に、その史觀はローマの史家タキツスの如く道德的見地より歷史を批判せんとし、ドイツの詩人 Schiller, Die Weltgeschichte ist das Weltgericht の句をひかれてゐるが、之は東亞共榮圈に於ける日本の立場、英國の位置を定め眞の世界平和、國際親善の道に通ずるものと思はれる。

博士の此の著書の初版に就いては既に史學雜誌第四十八編第九號（小野壽人氏）、史林第二十二卷第四號（西井克己氏）の紹介批評があつたが、此の機會に主として新たに全體の簡單な綱目をあげると共に主として增訂の部分を紹介をなしたい。

第一編「日英交通史概觀」として西歷千六百年（慶長五年）のウイリアム・アダムスの豐後渡來以後、明治・大正・昭和時代に至る迄の史實を概觀してゐられるが、特にその初期に重點をおかれてゐる。

第二編「日英交通史料」は日英交通史に關する內外の書籍、文書、寫眞、繪圖等をあげてゐられる。此の編は本書八五三頁の中の約半を占めてゐる。

第三編「初期日英交通史の重要文獻」はウイリアム・アダムス、ジョン・セーリス、リチャード・コックスに關する文獻をあげてその解說、研究をなしてゐられる。

第四編、第五編は「舊（倫敦）東印度會社と我國との交通貿易」はジョン・ブルースの著「東印度會社年代記」を中心として論究されてゐる。ブルースの此の本を始めて我が國に紹介されたのは博士の最も大きな功績の一であるが、博士は日英交通史の研究から夙に東印度會社の歴史の重要性を唱道せられ、先に昭和十年、九州帝大法文學部にて東印度會社史を講じられた事がある。

以上が初版の内容にして、新たに增訂第二版に於ては

第六編「日英交通の研究に貢獻せし幕末及明治時代の日英交通史上の三英國外交官」はサ・エルネスト・サトウ、W・C・アストン、A・B・F・ミットホルドの三人を擧げてゐられる。けだし博士の自序によると第一版が初期に重きを置き幕末・明治時代は比較的粗なりし故、その缺點を少しにても補はんとの微意に出でたものであると云はれてゐる。

第七編「西歴千六百六十一年の英葡結婚條約」は京都帝大所藏の British and Foreign State Papers よりその原文の英譯を示されたものである。

第六編の「三英國外交官」に於ては博士は簡單な傳記を附すると共に更にその各々の日本に關する著書を紹介し且つ日英交通史の上よりの史料的價値を縱横詳細に論じてゐられる。その一例をあげるとサトウ氏に就ては

「ジョン・セーリスの日本への航海日誌」の出版。「日本に於ける一外交官」その他の著書、論文をあげ、更に彼の著書目錄及び、彼の藏書に關しての興味ある事實を記してゐられる。博士はサトウ氏に關する論評の中に「學者の學術的業績はたゞ其著述のみによりはかるべきではなく、其學者が蒐集し得た書籍資料をも斟酌すべきである。」と述べてゐられるが、こゝに博士の學者としての抱負を見る事が出來ると思ふ。「日本に於ける一外交官」に關しては、英艦「イカルス」號水兵殺害事件に就て「勤王祕史佐々木老侯昔日談」と對照しつゝその史料的價値を論じてゐられる。アストン氏に關しては彼の日本文法や日本文學に關する著書をあげ、彼の日英交通史の研究に對する貢獻として日本亞細亞協會第七卷所載「一八〇八年の長崎に於けるフェートン號」なる論文を示されてゐる。ミットホルド氏に關しては、特に、明治元年英吉利公使館書記官として、長崎に於ける英艦水夫殺害事件に關して外國官知事伊達宗城に對する彼の照會の書簡の寫眞を掲示してゐられる。

以上第六編にはその他の重要なる問題が多く記載されてゐるが、以上を以てその内容の一端を示す事とする。

尙增訂版には新たに「日英交通史略年表」を加へられ、一五九八年（慶長三年）の蘭船リーフデ號以下五艘のロッテルダム出帆に始まり、一九三七年（昭和十二年）の秩父宮殿下の英國御渡英にわたつてゐる。

以上簡單に内容の紹介をなしたが、最も大きな特色の一は文獻學的、書誌學研究と、根本資料の蒐集とその史料的價値判斷にあり、且つ到る所示唆多き問題の提示がなされてゐる。けだ

し新しき研究分野を開拓し、且つ學問的精確を期する博士の態度の當然の歸結であらう。博士の資料の紹介は自らその書籍を内外より蒐集され、或は内外の圖書館、個人の所藏につき親しく披見研究されたるものが多い。此の事は如何ばかり我々後輩の學徒の研究の指針となり便益となるか計り知れないものがあらう。更に博士の博識はその經濟史的方面に於ける研究（例へばコックス日記の爲替、簿記の歴史上の價値）のみならず、文化史的、學術史的方面よりの研究を提唱され、更に增訂版に於ては國際法的立場よりの史實の新解釋の必要を力説されてゐる。又、最近、博士は久しく絶版になつてゐた菅沼貞風著「日本商業史」を編輯し、詳細なる註解を附してゐられる。本年よりは文部省の精神科學研究費を受けられて長崎に於ける日本と清蘭貿易を貨幣史的立場より研究される事になつておられる。我々は博士の御精進に對し滿腔の敬意を表すると共に御健康を祈つて止まない。

（中江副手）

文化史上に於ける歴山大王と成吉思汗

重松俊章

歴山大王のやうな夢想的な大事業を、極めて短日月の間に爲し遂げた「行動の人」（メンノブアクション）は世界史上でも稀有な存在であるが、而も此の夢想的な大事業の完成といふことが彼の生活の指導原理であつたといふことは古代希臘人の idée を最も能く具體化したものゝやうに想はれて面白い。

大王は紀元前二三四年に希臘を後にしてアジア遠征の途に上ぼり、同三二三年バビロンに凱旋してその年六月殂落するまで僅々十年餘で、小アジア・シリア・埃及から、イラーク・波斯・安息（パルチア）・アリアナのバクトリア・ソグディアナ・西北印度及び印度河流域と、殆ど中・西兩部アジア全體とアフリカの最大豐沃地域とを征服して、此の廣大な領土にヘレニズムを扶植して、古代の世界史の相貌性質を殆ど一變するの大事業を成就したのである。此の大王の偉業はその夭折に由て未完成のまゝに部下の諸將にパトンが渡されたのであるが、就中大王の東方領を繼承したものは將軍セレウコス・ニカートル（Seleucus Nicator）であつた。彼は此の廣大なる版圖に知事（サトラピー）を置いて、國都バビロン（後アンチオキア）からそれらを統轄しながら統治を續けたが、國防力の不備と中央政權の薄弱とから、間もなく西北印度・印度河流域・中南部アフガーニスタン（Ariana, Gandhāra, Sind）等の領地は新興の印度摩利耶（マウリヤ）王朝に奪還せられ、又紀元前三世紀半には北部アフガーニスタンのトカラ（大夏）の希臘植民地の知事 Diodotus が獨立して Bactria 王國を立て、同時に東北波斯のパルチヤ地方からはヒルカニア（Hilcania）の蠻族が蜂起獨立して、その部酋 Arsaces が安息王朝を建設し、之が次第に西方に發展してセレウコス王朝から波斯全土を奪取した。仍で歴山大王のアジア領は波斯の安息王朝に依て、東の大夏（バクトリア）と西のセレウコス王朝のシリア王國とに二分さ

れることゝなつた。偖、此處で問題となるのは斯くしてヒンヅークーシュ（雪山）山脈とオクザス河（アムダリア）とに限られた内部アジアの大夏王國（バクトリア）の希臘人である。此の國は紀元前二世紀前半に北方からスキタイ族の大月氏の侵略を受けてその藩屬となつたが、同時にその一部は雪山（ヒンヅークーシュ）を踰えてカーブール河流域（Ariana, Gandhāra）に移り、更にこゝから西北印度のパンジャブや印度河域のシンド地方にまで發展して、これらの地方にヘレニズム文化を傳播した。紀元前二世紀半に印度河流域の亞歴山市（アレキサンドリア）に據つた希臘王の彌蘭陀（メナンデル）は佛教信者として佛典にも出てくる著名な人物である。此等各地に據れる希臘人の王朝は Euthydemus, Eukratides などを始め幾多のものが分立した。之が名高い西北印度の Indo-Greek Kings と呼ばるゝものである。さて又西紀一世紀前後に佛教が之等の地方に傳播し、雪山以北の大月氏が此の山を踰えてカーブール河流域から西北印度やシンド（印度河流域）を呑併して、カーブル河口の健陀羅（ガンダーラ）（Gandhāra）地方にその首都を移すに及び、紀元二世紀前半に名高い佛教信者として知られた迦賦色迦王（Kanishka）時代には大乘佛教思想とヘレニズム（希臘思想文化）とが融和調和の結果、成立せる、謂ゆる健陀羅（ガンダーラ）美術の勃興・隆盛を見るやうになつた。此の美術が之等の地方で榮えたのは大體紀元一世紀――四世紀の約三百年間であつたが、之等が、佛教の東漸に伴うて支那に傳乘せられ、今でも敦煌（甘粛）・雲崗（山西）・天龍山（山西）・龍門（河南）などの洞窟寺院の石佛像に依てその面影が伺はれる。此の技術が隋唐時代に朝鮮を經て我が國にも傳はり、今でも法隆寺の飛鳥藝術にその手法の一端が遺されてをる。かゝる意味からすれば歴山大王のヘレニズムの東方普及の成果も亦偉大なりと云はねばならぬ。私見によれば歴山大王の東方領に於けるヘレニズムが東亞諸國へ傳播されたのは主として下表の如きものゝ手に由るのである。

ヘレニズムの傳道者
- 東方系（大夏・印度系）（健陀羅系）＝佛教徒
- 西方系（シリア系）＝景教徒　摩尼教徒

次に蒙古の成吉思汗も亦中世時代に東亞の生んだ稀代の英傑で、古代世界で歴山大王が演じた人類文化の一大變革劇を、異れる意味に於て、中世時代に再演した兩々相對比せる巨人である。その演出の樣相は前者を文型（老生）と見れば後者は正に武型（武旦）であつた。前者が開化の頂點に達せる、絢爛たる希臘文化を背景として舞台に現れたるに反して、後者は荒涼たる朔北の山野沙漠の地を舞台として、純朴粗野なる遊牧民のテント中から蹶起して、精悍無比の百萬の控弦騎卒を提げ、疾風迅雷の勢を以て、瞬く間（ヒマ）に蒙古を、支那を、中亞を、印度・波斯を席捲し盡し、遂に中歐・東歐各地に侵入して、當時基督教の阿片に中毒・麻痺して、長夜の甘夢を貪れる、闇黑時代の歐

洲人に、起死回生の大喝棒を喰はしたのであつた。

その結果が歐洲史上に與へた影響は如何であつたか。成吉思汗を中心とし、帖木兒大王を含む一聯の蒙古族の捲起した大旋風の結果は、東西の交通貿易と文化の交流を促進し、暗黑時代の歐洲の一大覺醒 Byzantine 帝國の沒落、舊文明の破碎の反動として古典の研究、文藝復興運動、地理上の發見、宗教改革等々が續發したではないか。歐洲人は動もすれば蒙古人の遠征を目して「惡魔の襲來」「天譴の降臨」となし、成吉思汗を以て「神の鞭（Acourge of God）などと貶稱するが、安んぞ知らん、此の英傑の偉業の結果が溫床となつて、歐洲近世文明が發芽し始めたものである。かゝる意味に於て成吉思汗の西洋文化史上に遺した功績は決して歷山大王が東亞文化史上に與へたそれに比べて勝るとも劣る處はないのである。

（昭和十六年六月八日　九州史學大會　講演要旨）

九州史學會本年度委員

顧問　長　壽　吉

常任委員　重松俊章　長沼賢海　竹岡勝也　日野開三郎　鏡山猛　小林榮三郎

委員　波多野晥三　辛島重義　伍賀道一　江島壽雄　本多四郎

書記　中野葛二（庶務會計）